称号及び氏名	博士（保健学）　森　泰祐
学位授与の日付	令和７年３月３１日
論　　文　　名	精神疾患患者の自伝的記憶に関する研究～パーソナルリカバリーに着目して～
論文審査委員	主　査　　石井　良平
	副　査　　内藤　泰男
	副　査　　横井　賀津志

学位論文の要旨

精神科リハビリテーションにおいて，ナラティブ（語り）は患者の回復過程に重要な役割を果たす．個人の経験や思いを言語化することで，自己理解を深め，他者との関係性を構築し，将来への展望を見出すことができる．しかし，精神疾患の診断を受けた人々は，1 日未満の特定の自伝的記憶を想起することが困難であることが知られている．自伝的記憶の特異性の低下は，問題解決能力の低下や将来の計画設計の困難さにつながる可能性がある．

個人の語りはパーソナルリカバリー（個人の主観的な回復感）において，中心的な役割を果たすと指摘されているが，パーソナルリカバリーおよび精神症状や認知機能などのクリニカルリカバリー（症状や機能の客観的改善）に影響を与える要因は十分に明らかにされていない．特に，自伝的記憶の特性がパーソナルリカバリーにどのように影響するかについては詳細な検討が必要である．本研究は，精神疾患患者におけるパーソナルリカバリーの支援方略を探索することを目的とし，以下の通り論述を行った．

始めに，第 1 章では，自伝的記憶に関する包括的な文献レビューを行った．具体的には自伝的記憶の定義（個人の過去の経験に関する長期記憶），主な機能（自己機能，社会機能，方向づけ機能），先行研究，主な測定方法（自伝的記憶テスト，ライフナラティブ法など）を整理した．特に，自伝的記憶の特異性の低下とそれに対する治療的介入（記憶特異性訓練など）に焦点を当てた．さらに，最後にパーソナルリカバリーと自伝的記憶との関連性を明らかにすることの意義についても概説した．

そこで，第 2 章では症状が比較的安定した慢性期統合失調症患者を対象に，首尾一貫感覚（Sense of Coherence；SOC）と認知機能低下および精神症状との関連を検討した．SOC は体験を振り返り認識するという点で，自伝的記憶の構造化や意味付けのプロセスと関連すると考えられる．その結果，SOC が発症による認知機能障害の程度と，気分変調症状の程度と有意に関連していることが明らかになった．特に，SOC の有意味感が認知機能低下と強い関連を示したことは，経験に意味を見出す能力が認知機能の維持に重要な役割を果たす可能性を示唆している．

最後に，第 3 章では，急性期で精神科リハビリテーション（精神科作業療法）に参加している精神疾患患者を対象に，パーソナルリカバリーに影響すると考えられる自伝的記憶とパーソナルリカバリーとの関係を主に検討した．また，パーソナルリカバリーに影響することが知られている年齢，精神症状，神経認知機能との関係も総合的に分析した．その結果，特異的な記憶の総数，特にネガティブな手がかり語に対する高い反応性が，より高いパーソナルリカバリーを有意に予測することが明らかになった．一方，年齢，精神症状，および神経認知機能には有意な関連がみられなかった．直感的には，ポジティブな記憶の

方がパーソナルリカバリーを促進することが予想され，ポジティブな記憶の活用を示唆する先行研究も存在する．しかし，本研究では異なる内容となった．従来，精神科リハビリテーションではネガティブなエピソードは扱うことは避けられる傾向があったが，本研究の結果は，それらの経験を適切に扱うことの重要性を示している．今後は自伝的記憶の特異性を高める介入プログラムの開発とパーソナルリカバリーの変化に対する効果検証が求められる．例えば，逆境や否定的な経験から得られる教訓や肯定的な変化を促進するベネフィット・ファインディングや，構造化した上でネガティブな記憶の特異性を高めるようなプログラムの開発などである．また，縦断的研究によって，因果関係を明らかにすることも重要な課題である．さらに，異なる診断群や病期における自伝的記憶とパーソナルリカバリーの関係性を比較検討することで，より個別化された支援方略の開発につながる可能性がある．そして，自伝的記憶の質的側面（例：記憶の感情価，自己関連性）についても詳細な分析を行うことで，パーソナルリカバリーとの関連性をより深い理解が期待できると考える．

論文審査結果の要旨

この研究は、精神科リハビリテーションにおけるナラティブと自伝的記憶の重要性を探究し、パーソナルリカバリーとの関連を明らかにしました。特に注目すべき点は、自伝的記憶の特異性、特にネガティブな手がかり語に対する高い反応性が、より高いパーソナルリカバリーを予測することが示されたことです。

研究は三つの章で構成され、まず自伝的記憶に関する包括的な文献レビューを行い、次に慢性期統合失調症患者を対象に首尾一貫感覚（SOC）と認知機能低下および精神症状との関連を検討しました。最後に、急性期の精神疾患患者を対象に、自伝的記憶とパーソナルリカバリーの関係を分析しました。

結果は、従来の精神科リハビリテーションの方法に再考を促すものとなりました。ネガティブな経験を適切に扱うことの重要性が示唆され、これは従来の傾向とは異なる新しい視点を提供しています。この発見は、より効果的な介入プログラムの開発につながる可能性があり、例えばベネフィット・ファインディングやネガティブな記憶の特異性を高めるプログラムなどが考えられます。

今後の課題として、縦断的研究による因果関係の解明、異なる診断群や病期における比較検討、自伝的記憶の質的側面の詳細な分析などが挙げられています。これらの研究の進展により、精神科リハビリテーションにおけるより個別化された支援方略の開発が期待されます。

この研究は、精神疾患患者のリカバリーにおける自伝的記憶の役割を新たな視点から捉え直し、より効果的なリハビリテーション手法の開発に向けた重要な示唆を提供しています。